

『どちらが異安心か』より抜粋

本願ほんがんの名号みょうごうが正定業しょうじょうごうなるが故ゆえに、如実によじつの信しんが正定業しょうじょうごう、如実によじつの称名しょうみょうが正定業しょうじょうごうのように、
名号みょうごうに破満はまんの徳とくが有あるから、如実によじつの信しんに破満はまんの徳とくが有あり、如実によじつの称名しょうみょうに破満はまんの徳とくが有あるから
祖師そしは称名しょうみょう破満はまんとされたのだ。腹はらを据すえて聞きき給たまえ、弥陀みだの名号みょうごうは光明こうみょう無量むりようの智慧ちえと寿命じゆみょう
無量むりようの慈悲じひとが有あるのだ、我々われわれはその反对はんたいで無明むみょうの闇やみに閉とざされて、無常むじようの生命いのちをかかえて
平氣へいきでいるのだ、哀あわれに思召おぼしめして調熟ちようじゆくの光明こうみょうで育てて下くださるけれども、罪つみを罪つみとも知らず
無常むじようを無常むじようとも知らずしに名利みょうりに迫お迫た立てられ色欲しきよくに狂くるわされて業流ごうるてん転つづを続けているのだ。そ
れで綽和尚しやくかしようは宗教しゅうきようが徹底てつていするのは罪惡觀ざいあくかんと無常觀むじようかんに攻め立たてられなければ真劍しんけんに求めないと
教おしえ、劍つるぎを抜ぬいて迫お迫た立てらるる無常觀むじようかんと帶おびが解とけないで地団駄踏じだんだふむ罪惡觀ざいあくかん、これを善導ぜんどう
大師だいしは群賊惡獸ぐんぞくあくじゅうに迫お迫た立てらるる無常觀むじようかんと、水火すいかの二河がに遮さえぎられ三定死じようしの境地きようちでぢりぢり
舞まいする罪惡觀ざいあくかんに攻め立せてられた時ときでなければ信仰しんこうは徹底てつていしないと実地じつちの求道きゅうどうが教おしえられて

あるのに、君達きみたちは机上きじょうの空論くうろんだけで合点がってんしているのだから痛くも痒くもないから有難くも嬉うれしくもないのだ。

光明こうみょう無量むりょうに照てらさるれば底そこの知れない罪惡ざいあく深重じんじゅうが知らさるるから罪惡ざいあく觀かんと教おしえられ、
寿命じゅみょう無量むりょうに比較ひかくすれば露つゆの命いのちの脆もろさに驚おどろく時ときが無常むじょう觀かんとなるのだ、君達きみたちには実地じつちの求道きゅうどうが
ないで始めはじから助たすかった積りつもで自分じぶんは宿善しゆくぜんが厚あついから素直すなおに頂いたたと自惚うぬぼれているのだから、一寸ちよつとも真劍しんけんさはないのだ、自分じぶんを抜きぬにして他力たうりきの名号みょうごうを眺ながめているのだから、自力じりきも
判わからなければ疑うたがいも判わからないのだ、学問がくもんとしての自力じりきも疑うたがいも立派りっぱに説明せつめいは出来できようが、
他力たうりきの中なかの自力じりきに腰こしを据すえ、疑うたがわんようにしているのを疑うたがい晴はれたように心得こころえているが疑うたがい
さえも知しらないのだ。

父善隆ちちぜんりゅう勧学くわんがくの在世ざいせい、お前は無明むみょうと言う事ことをよく研究けんきゅうして置おかなければならぬぞ、司教しきょう
でも勧学くわんがくでも無明むみょうが判わからないのぞ、無明むみょうとは煩惱ぼんのうの異名いみょうであるが、真宗しんしゅうでは痴無明ちむみょうと疑無明ぎむみょう

とのある事を忘れてはならないぞ。

痴無明とは馬鹿、馬鹿なるが故に三毒の煩惱を起こして流転を続けるのだ、これは信前
信後を通じて断たれない煩惱で開発すれば御恩慶ぶ種となる、「罪障功德の体となる、氷と
水の如くにて」と言うので御和讃で言えば

無明煩惱しげくして

塵数のごとく遍満す

愛憎違順することは

高峯岳山にことならず

これは山程有っても往生の邪魔にならない。

疑無明とは本願疑惑の無明だから、兎の毛の先で突いた程有っても往生の障りとなるので

御和讃では

無明の闇を破するゆえ

智慧光仏となづけたり

無明長夜の灯炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障重しとなげかざれ

正信偈では已能雖破無明闇、貪愛瞋憎之雲霧で、聞信の一念で鮮やかに疑無明は断除さ

れるのであると教えて頂いたが、真宗の道俗が自分達は仏様の仰せを素直に聞かして頂いて

いるから疑うた事はないと平気でいるが、疑うた事のない人間に晴れた世界が判るか、疑い

さえも知らない、信仰の方角が立たないのだから気に掛らないので、疑いの域に進んでいな

いのだから晴れた世界は全然判らないのだ、だから破闇満願は名号の具徳であって顕徳では

ないと言う馬鹿な説明しかできないのだ。君達は机上の空論で観念の遊戯をやって死後を眺

めて有難がり、読んだ学問、知った知恵で自心建立の心を堅めているけれども、真面目な

求道者は三十年も五十年も聞かされ、耳に聒聒ができる程聞いて合点はしているけれども、

出て行く後生となればどうも気に掛る、三毒五欲の煩惱は往生の邪魔にならないと聞きなが

らどうもはつきりせん、ひよつと墮ちおはせぬか、これでよいかしら、何とかなんなれそうなの、唯ただとは仰おつしやるけれども、この胸むねがと自分じぶんの機きに立ち戻もどってさっぱりしないものがある時ときは皆みな疑うたがいなのだ。それを専門語せんもんごで疑無明ぎむみょうと言いっているのだ。法ほうを眺ながめて疑うたがう者ものはいないけれども機きを眺ながめた時ときに疑うたがいも心配しんぱいもでるのだ。

しかるに君達きみたちは実地問題じつちもんだいに成なっていないから機きを見るみのを毛虫けむしのように嫌きらい、機きを突つく者ものを目敵めがたきのように思おもって異安心いあんじんと言いっているが、鏡かがみに向むいて眼めをつぶっている馬鹿ばかがおるか、法ほうに向むかって機きを包つつんでいる馬鹿ばかがおるか、この機きを見みせて貰もらってこそ役やくに立たたない事ことを知しらさるるのだ、君達きみたちはどうも成なれないのだと始はじめから匙さじを投なげている無帰命安心むきみょうあんじんで任まかせた積つもりでいるから、無味乾燥むみかんそうで功德大宝海くどくだいほうかいの顕徳けんとくがないのだ。疑うたがう事ことのない人間にんげんに晴はれた世界せかいがあるか、無明むみょうの闇やみに閉とざされて煩惱ぼんのうは往生おうじようの邪魔じゃまにならないと聞ききつつも、何年なんねん聞いても晴はれられないで、やめるにもやめられず進すすむにも進すすまれず、三毒どくの煩惱ぼんのうは往生おうじようの邪魔じゃまになら

ないと言いつつも邪魔になるではないか、それは疑無明の根が切れていないからだ。第十八願は十方衆生を救うと言いながら五逆も謗法も闡提も邪見も憍慢も弊も懈怠も自分の腹底ではないか。

三世の諸仏に嫌われた上に第十八願からも除かれて何処に行くのだと自己の罪惡の深さの知らさるる事は光明無量の智慧ではないか、今無常の風に誘われたらどうなるのだと実地に攻め立てられた時書物を読んだ合点位で通れるか、涅槃經には三界無安猶如火宅と言い、善導大師は火宅を出でずと言われたが、今が火を噴く地獄ではないか、とぢりぢり舞いして往生の望みの絶えた時思慮分別や言辞の及ぶところであるかい、我能く汝を護らんの声なき声に貫かれた時は同時であって、一切の無明の闇は晴れて往生の望みの契うた大満足、寿命無量の慈悲に生かされた天地のひっくり返った大慶び、聖人は廣大難思の慶心、五劫思惟の願をよくよく案ずれば親鸞一人が為なりけり、十方法界我が物なり、彼仏今現在成仏当知

本誓重願不虛 法龍 称念必得往生、親が生きたぞ子が生きたぞ、本願や行者 行者や

本願、私が弥陀やら弥陀が私やら、君達のような継子にはこんな味は逆とんぼしたって判ら

ないのだ、生命懸で求めている君達に無量永劫の解決のついたこの顕徳の味が判るものか

い。

破闇の儘が満願、満願の儘が破闇なのだ、光明無量の智恵が徹底すれば一切の疑無明が晴

れわたり、寿命無量の慈悲が徹底すれば衆生の志願は満足出来るのだ、衆生の最後の願いは

何だ、地位か名誉か財産か、総ての物は滅びて行く、無量寿の証こそ最後の目的ではない

か、親に離れ子に別れ 夫を喪い妻を亡くして悲劇を味わい、再び別れぬ身になりたいと望

むのが最後の目的ではないか、死にともないから宗教を求めるのだ。崩れ行く望み、滅び行

く身体、何がたよりに成るのだ、風前の灯火、露の命、一瞬の夢ではないか、出息入息

永劫流転に運ばれて行く、恐怖と破滅のどん底に沈む時、我能く汝を護らんの声なき声に呼

び覚さまされた時とき、晴はれたか晴はれぬか判わからぬか、満まん足ぞく出来できたか出来できぬか判わからぬか、時じ間かんに何なんの
関かん係けいが有ある、親おやに摂せつ取しゅされた味あじに用よう事じが有あるのだ。弥み陀だの名み号ごうは光こう明めい無む量りやうの智ち慧えなるが故ゆえに
衆しゅ生じやう一いつ切さいの無む明めいの闇やみを破やぶり、弥み陀だの名み号ごうは寿じゅ命めい無む量りやうの慈じ悲ひなるが故ゆえに衆しゅ生じやう一いつ切さいの志し願がんを満まん
足ぞくさす事ことが出来できるのだ。名み号ごうの具ぐ徳とくは衆しゅ生じやうのうえに顕けん徳とくと顕あらわれなくて何なんで妙みやう用ゆう有ありと言いえよ
う。君きみ達たちは平へい生ぜい業ごう成じやうと説ときながら実じつ地ちの開かい発ほつがないから この世よではどうも成なれない、死しに
さえずれば弥み陀だ同どう体たいと死し後ごを眺ながめている者ものに顕けん徳とくの顕あらわれる筈はずがないのだ。

信しん卷かんに「金こん剛ごうの真しん心しんを獲ぎ得とくすれば横おうに五しゅ趣なん八だう難どうの道こを越かなえ必げんず現しやう生しゅに十しゅ種やくの益うを獲うる」の
中なかの第だい二にの至し徳とく具ぐ足とくの益やくは具ぐ徳とくか、御ご和わ讃さんの

世せの盲もう冥みやうを照てらすなり

光こう暁ぎやうかぶらぬものはなし

有う無むをはなるとのべたまふ

一さい切げの有う碍がいにさわりなし

一切さいの業ごう繋けものぞこりぬ

三塗ずの黒闇こくあんひらくなり

これは皆具徳みなぐとくか、

南無阿弥陀仏なむあみだぶつをとなふれば　この世よの利益りやくきはもなし

流る転てん輪りん廻ねのつみきえて

定業じょうごう中天ちゅうようのぞこりぬ

等とうとある現世げんせい利益りやく和讃わさんは全部具徳ぜんぶぐとくか、

五濁じよくあく惡世しゆじようの衆生しゆじようの

選せん択じやく本願ほんがん信しんずれば

不可ふか称しょう不可ふか説せつ不可ふか思議しぎの

功徳くどくは行者ぎじやうの身みにみてり

というのも具徳ぐとくか、それなら顕徳けんとくは何時いつ何処どこで頂いたくのだ、君達きみたちはとぼけてはいないか、正氣しやうき
の沙汰さたか、畢竟ひつきよう君達きみたちに実地じつちの求道きゅうどうがないから開発かいほつの妙味みやうみがなく、本願ほんがん疑惑ぎわくの微妙びみょうな疑うたがいを知し

らないから弥陀の利剣の切れ味を諦得せず、無常の恐ろしさに泣いた事がないから摂取され
た大満足の境地に立つ事が出来ないのだ、だから君達は破満の顕徳を頂いていないのだ、頂
いていないからこの世の利益きわもなしが判らないのだ。選択本願信ずれば不可称不可説
不可思議の功德は行者の身に満てり、とあるが君達は合点しただけで信じていないから、
不可称不可説不可思議の功德が身に満ちていないのだ、行者の身に満つるのだけれども自惚
れて教化の立場ばかりにいる為に行者でないのだ、行者とは実行する者、実行とは南無
阿弥陀仏を体験したもの、光明の知恵を体験した者は愚痴がなく、寿命の慈悲を体験した者
は不安がなく、感謝と法悦の生活が出来るからこの世の利益は限りがないのだ。

大沼は三千世界の果報者だ、人界受生の最大幸福者だ、君達は喜べないのを手柄のように
思っているが、喜べないのは貰い物が足りないからだ、喜べなければ参れぬかと言っている
が、参れる事が決まったら喜べるのだ、聖人は「真に知んぬ専修にして雑心なる者は大慶喜

心を^{しん}得^えず」と仰^{おほ}せられたが、名号^{みょうごう}に眼^めをつけただけで腹^{はら}の解決^{かいけつ}がついていないから慶^{よろこ}べないのだ。光明^{こうみょう}無量^{むりやう}が衆生^{しゆじやう}に届^{とど}けば信^{しん}、寿命^{じゆみ}無量^{むりやう}が衆生^{しゆじやう}に届^{とど}けば楽^{ぎやう}、信楽^{しんぎやう}の二字^じが第十八願^{だいじゅうはちがん}に顕^{あらわ}れ、成就^{じやうじゆ}の文^{もん}には信心^{しんじん}歡喜^{かんき}と開^{ひら}き、付属^{ふぞく}の文^{もん}には踊躍^{ゆやく}歡喜^{かんき}と教^{おし}え、行卷^{ぎやうかん}には獲信^{ぎやくしん}見敬^{けんきやう}大慶^{だいきやう}喜^き、信卷^{しんかん}には広^{こう}大難思^{だいにんし}の慶心^{きやうしん}、迷^{まよ}いの打^うちどめをさされて慶^{よろこ}ばずにおれるか、觀念^{かんねん}の遊戯^{ゆうぎ}や死後^{しご}の夢物語^{ゆめものがたり}位^{くらい}で喜^{よろこ}べるか。聞信^{もんしん}の一念^{ねん}に八万^{はうぞう}の法藏^{はうぞう}を讀^よみ破^{やぶ}り、十方^{じゅうほう}法界^{ほうかい}の功德^{くどく}を全領^{ぜんりやう}して何^{なん}の不足^{ふそく}が有^あるのだ、この世^よの利益^{りやく}きわもなし、この精神^{せいしん}的^{てき}の大満足^{だいまんぞく}には肉體^{にくたい}的^{てき}の大満足^{だいまんぞく}も具足^{ぐそく}しているのだ、見る物^{もの}聞^きく物^{もの}皆^{みな}仏法^{ぶつぽう}だ。

昭和^{しやうわ}二十年八月八日（終戦^{しうせん}七日前^{ななひるまえ}）本堂^{ほんどう}も庫裡^{くり}も空襲^{くうしゆう}で烏有^{うゆう}に歸^きしたが一度^{いちど}も泣^ないた事^{こと}もなければ悔^くやんだ事^{こと}もない、今迄^{いままで}の果報^{かほう}はこれで終^おわつたのだ、一面^{めん}から言^いえば業^{ごう}の清算^{せいさん}又^{また}一面^{めん}から言^いえば日本^{にほん}国^{こく}中^{ちゆう}灰燼^{かいじん}の中^{なか}、或^{ある}いは外地^{がいち}から引^ひき上^あげた呪^{のろ}いの中^{なか}に、信仰^{しんこう}が有^あれば不平^{ふへい}がなくて感謝^{かんしゃ}しつつ復興^{ふっこう}が出来^{でき}ると姿^{すがた}に掛^かけて説法^{せっぽう}せよと仏様^{ほとけさま}より与^{あた}えられた使命^{しめい}と思^{おも}ふ

えは尊くもあれば嬉しくもある。衣は戦前お召は二枚しかなかったのに恵まれて六枚になり、ワイシャツ、靴下まで買った事がなく、食は戦いの前後を通じて配給米を食べた事がなく、住は見事に復興して支坊まで与えられて焼け太りとなり、私立幼稚園では九州一の施設を誇り、家族中は和楽の生活を続けている事が 愛楽仏法味禅三昧為食永離身心悩受楽常無間　これがこの世の極楽ではないか、死んだ先の極楽は親に連れて行かるのだから世話する事はいらぬ、順境に恵まれるれば仏祖の加護や祖先の陰徳を慶び、不幸に遇えば蒔いた種の愧しさを懺悔する、至徳具足の益を慶び、転悪成善の益を感謝する、順逆共に廣大無辺の仏智の御計らいと讃えずにはおられないではないか、今日が満足、今日が仕合せ、鳥の囀る声までが天然の音楽であり、四季の花の美しさはこの世の極楽の莊嚴であり、社会の悲劇のその儘が因果の道理を展開する生きた説法ではないか、十界をこの世に転じて従楽入楽、従苦入苦、各自が主役になって演出している有様は生きた仏法である。何の

娯楽もなく、何の執着もなく、一も説教、二も説教、法味楽のこの喜び、堕ちるがどうかの心配もなく、参らにやならぬの力みもなく、南無阿弥陀仏阿弥陀仏、親が子を呼び子が親を呼ぶ、これが六字の顕徳でなくて何処で顕徳を頂くのだ、名号の具徳は衆生の上に顕現してこそ生きた仏法と言えるのではないか、精神的の満足の儘が肉体的の活動、宗教の儘の生活、真諦門の儘の俗諦門の活動であってこそ生きた仏法だ、不平や愚痴を並べてこの世ではどうもならないのだ、死にさえすれば・・・阿呆も休み休み言いなさい、この世に不満を懷いている儘が自業苦ではないか、その結果が地獄ではないか、現当二世の幸福と言いながらこの世が救われていないではないか、平生業成と言いながら現生不退に成っていないではないか、現在心の往生たる不体失往生が徹底していないのに死後の即得往生が望めるか、明らかに因果が矛盾しているではないか。